



Ignis 2025 年度 秋号

イグニス = 炎

2025 年 10 月 1 日発行

六甲学院中学校・高等学校 宗教部

今年は、9 月に入っても猛暑が続き、このままいくと 10 月まで続きそうでしたが、さすがに 10 月に入ると、朝晩の冷え込みが続き、秋は確実にやってきました。「秋号」としましたが、内容は、5 月と 6 月とに行われた Magis の日のお話しの原稿と生徒による振り返りの紹介、夏休み中に社会奉仕活動で行った能登半島ボランティアの生徒記事の二本立てです。これからさわやかな実りの秋が訪れますように祈っています。

愛する愛・愛を受け取る愛

2025 年 5 月 15 日(木) Magis の日講話

おはようございます。本年度 1 回目の Magis の日の担当の青木光博です。まず、Magis の日とは何であるかを、主に中学 1 年生に向けて説明します。中学 2 年生以上の人も、聞きながら今一度 Magis の日をより良く過ごせるように確認してください。

Magis の日を短くまとめれば「より善く生きるためのふりかえりの日」です。自分の生活について、あるいは人生について、その生き方が善いものであるか、より善くできないか、また、あえて神さまを登場させれば、自分の生き方が『神さまの目にとって善いものであるか』をふりかえる日です。

大事な注意ですが、ふりかえる、ということは反省することとは違います。反省は、自分の悪いところを自分で挙げ、それを繰り返さないように考えることです。反省自体は悪いことではありませんが、反省に登場するのは自分しかいません。悪いことをしたのも自分なら、悪いところを取り上げるのも自分で、繰り返さない方法を考えるのも自分です。これが反省です。

一方、ふりかえりは主体が自分ではありません。一步引いた立場で自分に第三者の目を投げかけ、この、私という人物は日々どのように生活しているだろうか、あるいはもっと善く生きられないだろうか、と考えることがふりかえりです。

以上のように、反省は主観的なものであるのに対し、ふりかえりはより客観的な作業です。自分の中に他者の目を持つことは、普段通りに過ごしてはできません。だから Magis の日は、静かに考えることが必要です。この朝礼の話は考える材料であって、一日を通してその材料を使って自分をふりかえます。終礼でのふりかえりでは、そのときまでに気が付いたことを書き留めます。可能なら、帰宅し、就寝するまで静かに考え続けられ(=黙想でき)れば理想です。

わたしたち六甲学院は、特にイエズス会の学校として、この『ふりかえり』の時間を定期的にとることが、あなたの人生を豊かにするものであると信じています。皆さんはこの日をより良いものとして使えるように、活用しましょう。

世間では、前を向くことばかりが強調されます。しかし、前を向いていても、進む方向自体が間違っていたら、あらぬ方向に進んでしまいます。歩く途中では、立ち止まって地図を広げ、自分がどこにいて、どちらに進んでいるか確認するために、ふりかえりの時間をとるのです。

それでは始めましょう。

愛する愛・愛を受け取る愛

今日のテーマは愛について、それも2種類の愛について考えます。一つは愛する愛、もう一つは相手の愛を受け取る愛です。

聖書から引用します。マルコによる福音書の14章3節からです。

イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。そこにいた人の何人かが憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」

(注) キリストとはメシア(ヘブライ語)のギリシャ語訳です。メシアとは「油注がれたもの」という意味でした。イスラエルの歴史で王となる者は油をかけられるのが習わしでした。油をかけるのは相当の地位のある男性によって注がれました(例えばサムエル記上10:1)が、ここでイエスは貧しい女性から油を注がれています。

一度止まりましょう。意味は取れましたか。

イエスがこの世にいた頃、イエスは見捨てられた人、貧しい人の家々を訪れて、その人たちを救っていました。引用した箇所ではイエスは、重い皮膚病の人の家を訪れています。不治の病や、特に病気が目に見えて重い人は、差別され、虐げられ、社会のお荷物扱いされていました。さらに、ここではその家の女性とあります。男女差別の激しかった(家父長制の)エルサレムでは女性の地位はさらに低いものでした。ここでは、その女性が、おそらく家の唯一の財産ともいえるべき高価な油を、壺を割ってまでイエスに注ぎました。その様子を見て、周りの人々はそんなことをせずにそれを売ってより貧しい人を救う方が皆のためになる、といいます。

皆さんがこの周りの人の立場ならどうしますか。この現場にいたら、どう振る舞うでしょうか。考えてみてください。

この周りの人が言うこと、つまり、高価な油は注ぐよりも、売り払ってもっと貧しい人に施した方がよい、という考え方には一理あるように思います。現代に置き換えたら、一理どころか、称賛されることのようにすら思われます。『身近な金目のものを売って、貧しい人に施す。』少し前のYouTuberがネタにしていそうです。高価なものがあるならば、それを売ってたくさんの人を救うべきだ。これは一見、合理的で善いことのように思います。

それでは、続けてそのあとのイエスの言葉を聞きましょう。

イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はできる限りのことをした。」

さて、高校生の皆さんのなかにはきちんとした恋愛を経験したり、あるいは今している人もいるでしょう。きちんと、とは興味本位でない、相手のことを慮った恋愛のことです。もし、さらに失恋を経験していたらわかると思いますが、失恋の悲しみが大きい理由の一つは「私の思いがもう相手に伝わることがない」と容赦なく実感させられることにあります。連絡が取れなくなったり、たとえ連絡してももう以前のような親密さは感じられなくなったりします。

あるいは、おじいちゃんやおばあちゃんなど、大切な人を失った経験はありませんか。大切な人と死別すると出て来る思いは「もっと自分はその人を大事にできたのに」という思いです。忙しいからと断ったこと、つ

まらない喧嘩、話し相手にならなかったこと、お礼ができなかったこと、そのようなことです。

さて、今一度、聖書の状況を考えてみましょう。病気で貧しい家に女性がいます。その人の人生、虐げられてきた人生、そしてこれからも虐げられ、死ぬまで施しにすがらざるを得ないような人生において、目の前にとても大切な人が現れました。その女性にとって、大切な人にできるもっとも大事なことは何でしょうか。

わたしにはそれは、愛すべきときに愛すべき方を愛することにあるのだ、と思います。その愛が実行でき、確かに受け取られれば自分の人生に意味があった、とさえ思えるように思います。

また、逆の立場にもなってみましょう。あなたが生活しているとき、あなたのことを大切にしたいという人がいるとします。その人にとっては、そのとき、他ではないあなたに愛が受け取られることがその人の全てです。さてこのような状況のとき、あなたはその人の愛を受け取ることはできるでしょうか。あるいは愛として受け取れているでしょうか。イエスは周りの人たちの言うことを遮ってまで、目の前の貧しい女性の、唯一の財産である油を使うという、まさに自分の身を切り裂くような、献身的な愛そのものを受け取りました。

私たちは自分勝手なもので、自分の与える愛は貴重で純粋でかけがえがない、と思う一方、他人が与える愛については、あって当たり前のもの、あるいは愛にちょっとでも不完全なところがあると、そこを指摘してあげづらいさえます。傍から見れば自分の愛も不完全なのに、相手の愛が不完全だ、と怒るのです。

この私たちの身勝手さを乗り越えるには、まず自分の愛の不完全さを認め、そして、相手の不完全な愛を、よく愛することだと思います。

私たちは人を幸せにするためにこの世に生を受けています。そして、周りの人たちも人を幸せにするためにこの世に生を受けています。仕事も勉強もスポーツも文化活動も、体育祭も文化祭も、周りの人を幸せにするからこそ、そこに価値があるのです。自分が「偉い」から周りの人が従ったりお金を払ったりするものではありません。

つまるところ、私たちは人間であって、科学や経済や哲学が生みだした技術や機械や思想の産物ではないということです。ときに世俗の合理性を越えて、愛することと愛を受け取ることが必要なのです。いえ、必要である以上に、その愛こそが、あなたという『人間』、一度きりで一人きりの『人間』が生の意味を持つのではないのでしょうか。

今日のふりかえりの質問は2つです。どちらか一方でも、両方でも、ふりかえって考えてみてください。Magisノートには具体的なエピソードを交えながら書くとよいでしょう。

● 1つ目。あなたはベタニアの女のように、自分にとって大切な人を大切にできているのでしょうか。大切にすることは、ぼんやり「大切かもね」と思っていることだけではありません。適切なタイミングで適切な行動をすること。ときには周りの目を気にしない勇気のある実践が必要です。

● 2つ目。あなたはイエスのように、自分に向けられた愛をきちんと受け止められているのでしょうか。あなたに向けられた愛はあなたにとって意図しないタイミングでやってくるかもしれません。あなたにとってはじめは理解不能な形でやってくるかもしれません。時には親や先生などから叱責や指導の形でやってくるかもしれません。その愛を受け取れているのでしょうか。

今日の Magis の日の話は以上です。

はじめに言ったように、今日は静かに、自分の中に第三者の目を持って、自分をふりかえってみましょう。

生徒の振り返り

● 母が怒る理由は、無論私が悪い行いをしたからだが、それは私を想う愛が原動力となって、私が社会に出て恥ずかしくないようにするための原動力だと思う。私は今、訓育性という役割をいただいている。母が私に怒る理由と同じで、私たち訓育性が後輩を指導するのは、先輩から後輩への愛があるからだと思う。わたしもその愛を持って後輩を指導したい。

● 去年の末、同級生だったある友達が帰り道に「来年から俺学校いないわ」といいました。いつも冗談を言ってくる奴だったので「冗談やろ」と言って笑い飛ばしてしまっていました。結局その日があいつと一緒に帰れる最後の日だったのに、もっと伝えていれば良かった、という後悔が今でも心にききます。家もとても離れているという訳ではないですが、あいつは必要最低限の外出しかしません。今度会ったら、もっと心を通わせたい。

● あるとき妹がどうしてもほしいものがあると言っていたが、親と言合いになり必要なものが買えないと言いはじめました。それまで僕は妹から色々なものや考えをもらっていたので、近くの店まで行って買ってあげたのですが、その時、形はどうであれ恩返しの大切さが少しわかった気がしました。

● 自分がスマホを使いすぎたり、制限を勝手に解除して怒られたとき、悪態をついてしまうことがあった。しかし、後になって考えてみると親は自分に対して、目が悪くなってしまうかもしれない、勉強がおろそかになり学校の授業についていけなくなるのではないかという心配を向けていたのではないかと思う。愛するということには様々な形があると思うが、どの場合にも愛する相手のことを忘れずに考えている。それを受け取れなかった自分は不誠実だったと思う。

● 僕や生命は生きることによって最大の愛を伝えられると思います。自分という存在が愛という形に変わり、他人に与えることが可能だと思います。

次ページから、岩井先生の Magis の日の講話を載せています。

2025 年 6 月 23 日 MAGIS の日（担当：岩井あづさ）

本日は皆さんに「償い」や「許し」について考えてもらいたいと思います。今回は歌手のさだまさしさんが作詞作曲した『償い』という唄の歌詞を紹介します。私は初めてこの唄を聞いた時、ぞくぞくと身体が震えるような感覚になりました。歌詞から三つの点を考えます。

- 1 「交通事故を起こしたゆうちゃん（加害者）」の気持ち（罪やあやまちの償い）。
- 2 「交通事故で死亡した男性の妻（被害者）」の気持ち（罪やあやまちの許し）。
- 3 「償い」や「許し」について考えること（自分自身の経験と共に、もしくは本日の歌詞や話から）

1～3 の中で心に残ったことについて放課後のMAGISノートに書いて下さい。

まず償いや許しについては、辞書や本に様々な説明が載っていましたので紹介します。

<岩波国語辞典 第二版 より>

- ・「償う」…金品や労力を提供し、または何かの方法で罪やあやまちのうめあわせをする。
- ・「許す」…①差し支えないと認める。（イ）願いなどを聞き入れる、（ロ）罪・とが・負担を免ずる、（ハ）禁を解く。（ロ）（ハ）は「赦す」とも書く。今回の赦すは、（ロ）になるかと思います。

<宮城学院女子大学 HP もりのこどもえんだより：巻頭言 許しと赦し より>

- ・「許す」はこれから行う行為を認めること、「赦す」はすでに行った行為の失敗を責めないこと。

<キリスト教神学用語辞典 ドナルド・K・マッキム著 より>

- ・「赦し」…罪を赦すこと、赦免（しゃめん）。これが、罪や疎外感の後に、神や他者や自分自身との良い関係を回復させる。「人を許せない」「我慢がならない」、という経験を皆さんはしたことがあると思います。自分が「被害者」の立場になり、自分を苦しめ惑わせる「加害者」の相手に対し、怒りの感情を持ち、絶望的、自分はとても不幸だ、と思ってしまうような気持ちです。

（例）

- ・友達同士で一緒に遊ぼうと言っていたのに、自分を除く他の人たちだけで話が進められ、自分はいれもらえなかったこと。
- ・自分が困ったら人にアドバイスや助けを求めるのに、人のことは助けずお返ししてくれない友達。
- ・すぐに失敗をして周りの人を困らせる友達。
- ・恋人関係や夫婦関係で、相手の人が自分以外の人を好きになり、失恋や離婚に追い込まれること。
- ・いつも自分のミスを指摘する家族。
- ・頑張って取り組んだのに、先生に低い評価をされたこと。

このように、人から裏切られたり、被害を受けたり、プライドを傷けられたりすると、怒りや悲しみの気持ちがわいてしまいます。

また逆の立場で、罪とは言えないまでも、あやまちを犯し、人を傷つけてしまう経験をしたことがあるのではないのでしょうか。人に少しの意地悪をする、自分が得になるようなことをする、などです。

「人を許せない」「我慢がならない」と思った時、身体は硬直し、表情は陰しくなり、不機嫌な気持ちになり、

冷たく固まってしまう。そして、しばらく経ち、「誰かに心の苦しみを話した時」「誰か別の人に助けられた時」「もう忘れようと思えた時」など、心がその問題から「離れた」時、身体も表情も気持ちも緩み、軽くなります。縛りから解放されたような感覚です。その人やそのことが気にならなくなり、心が平常に戻り、また前を向いて歩いて行くことができるようになる、こういう経験はあると思います。

人に意地悪をしたり、自分が得になるような経験をしたりした時も、初めは理由をたくさん並べ、自分のあやまちをすぐに認めることができませんが、しばらく経って「やっぱり自分は良くないことをした」と思った時、心が軽くなります。このように、自分のあやまちを自分が認めた時、キリスト教の神様はとても喜んで下さいます。

2001年東京都世田谷区の東急田園都市線内において、4人の少年が、泥酔した43歳の男性から、「足が当たった」と絡まれ口論となり、駅のホームに下ろされ暴行を受けました。少年はその暴力に対応する形で男性の意識がなくなるまで暴行を加え、放置し、後にくも膜下出血で死亡させるという事件が起きました。主犯格の少年2名が傷害致死罪に問われ逮捕されました。少年は裁判中、「申し訳なく思います」「自分という人間を根本から変えたい」という反省の弁を述べたのですが、過剰防衛であると主張し、淡々とした態度や発言から、真に反省しているかどうか疑問を抱く態度を取りました。その事件での裁判長の判決の言葉です。

「唐突だが君たちはさだまさしの『償い』という唄を聴いたことがあるだろうか」判決文を聞いていた二人だけではなく、傍聴者も驚きました。裁判官が、具体的に唄の題名を述べて被告を論ずことは異例のことなのです。説論が続きました。「この唄のせめて歌詞だけでも読めば、なぜ君たちの反省の弁が人の心を打たないか分かるだろう。」。判決の翌日、加害者の一人の少年の叔母から、歌詞を書き写した手紙が東京拘置所へ届いたそうです。その後、少年たちは控訴することなく実刑判決が確定しました。

この裁判長の説論は「償い裁判」と呼ばれ、マスコミに取り上げられ話題になりました。では、裁判長が説論に引用した唄『償い』の歌詞を紹介します。歌詞は実話で、誰かの大切な人の命を奪うという、大きなあやまちを犯してしまった人の話です。なかなかそれぞれの立場に置かれる経験はないかもしれませんが、交通事故を起こしたゆうちゃんや、交通事故でなくなった男性の妻の気持ちを考えてみましょう。では、歌詞を読み上げます。

◆ 作詞・作曲：さだまさし～『償い』◆

月末になると　ゆうちゃんは薄い給料袋の封も切らずに　必ず横町の角にある郵便局へと飛び込んでゆくのだった　仲間はそんな彼を見てみんな貯金が趣味のしみつたれた奴だと　飲んだ勢いで嘲笑っても　ゆうちゃんはニコニコ笑うばかり

僕だけが知っているのだ　彼はここへ来る前にたった一度だけ　たった一度だけ悲しい誤ちを犯してしまっただ

配達帰りの雨の夜　横断歩道の人影にブレーキが間に合わなかった　彼はその日とても疲れてた

人殺し　あんたを許さないと　彼をののしった　被害者の奥さんの涙の足元で　彼はひたすら大声で彼はひたすら大声で泣き乍ら　ただ頭を床にこすりつけるだけだった

それから彼は人が変わった 何もかも 忘れて 働いて 働いて 償いきれるはずもないが せめてもと 毎月あの人に仕送りをしている

今日ゆうちゃんが僕の部屋へ 泣き乍ら走り込んで来た シャクリあげ乍ら 彼は一通の手紙を抱きしめていた

それは事件から数えてようやく七年目に初めて あの奥さんから初めて彼宛に届いた便り

「ありがとう あなたの優しい気持ちは とてもよくわかりました だからどうぞ送金はやめて下さい
あなたの文字を見る度に 主人を思い出して辛いのです あなたの気持ちはわかるけどそれよりどうかもう
あなたご自身の人生をもとに戻してあげて欲しい」

手紙の中身はどうでもよかった それよりも 償いきれるはずもない あの人の返事が来たのが ありがたくて ありがたくて ありがたくて ありがたくて ありがたくて

神様って 思わず僕は叫んでいた 彼は許されたと思っていいのですか 来月も郵便局へ通うはずの やさしい人を許してくれてありがとう

人間って哀しいね だってみんなやさしい それが傷つけあって かばいあって
何だかもらい泣きの涙がとまらなくて とまらなくて とまらなくて とまらなくて



加害者のゆうちゃんは、一度の失敗をしてしまいました。しかしその失敗が、人の命を奪うものとなりました。その後のゆうちゃんの態度や気持ちはどうだったのでしょうか。

被害者である亡くなった男性の妻の態度や気持ちはどうだったのでしょうか。ゆうちゃんの態度を見て、許す気持ちになったのでしょうか。

そして、なぜ、裁判官は、暴行をして相手を死なせた少年達にこの唄『償い』の題名を述べて諭したのでしょうか。

被害者である亡くなった男性の妻の気持ちを考えた時、私はノートルダム清心女子大学の学長であった渡辺和子シスターのことを思い出しました。シスター渡辺の父は 226 事件で青年将校らに命を落とされた陸軍教育総督の渡辺錠太郎の次女でした。シスター渡辺は 9 歳の時に目の前で父親が銃殺され、その後、大人になっても気持ちのやり場のない苦しい日々を過ごしました。そして、青年将校達の遺族が毎年行ってきた法要が 50 年目になった時、シスター渡辺は法要に訪れました。これまで被害者側の遺族が法要に来たことはなかったので驚く光景となりました。当時、父親の銃殺のとどめを刺した安田優（ゆたか）氏の弟が法要の場にいました。父を殺した兵士の墓参りをするシスター渡辺を見て、いても立ってもいられず、自分の素性を明かしたということです。その後、加害者側である安田氏と、被害者側であるシスター渡辺の交流は 30 年続いたということです。この話をテレビで見た時、私は心の中に何か温かい物が流れました。加害者と被害者という立場は、一本の線の両端に置かれているような、全く反対の立場で、相容れないと思っていました。しかし、近づいて心の交流をし、互いに心の折り合いがつくことができることもあるのだと思いました。

後のインタビューで、シスター渡辺が、父を殺した兵士を許せるまで 50 年かかったと明かした上で、法要に参加することが『自分にとっても必要なことだった』と話したそうです。また、著書『忘れかけていた大切なこと』の中で「許すことによって救われるのは、実は許された相手以上に、許した自分自身であることを私は

今まで何度も経験してきた>と書かれています。

先ほどの歌詞の、加害者のゆうちゃんは、自分のあやまちを認め、できる形で懸命に償いました。キリスト教の神様は自分の弱さを認めてくれた人を助け愛してくださいます。しかし、交通事故で亡くなった男性の妻は、加害者のゆうちゃんを赦す気持ちになれたかどうか分かりません。それでも、ゆうちゃんの償いの気持ちは伝わったことでしょう。ゆうちゃんに手紙を書くことで、心の交流が生まれました。男性の妻は自分の怒りや悲しみの気持ちをゆるめることができたかも知れないと思いました。

今回のような、人の死に関わるような加害者や被害者の経験を私はしたことがありません。しかし、どちらの人もひどい苦しみの中にいる、しかしどちらの人もこの世に生を受けた以上、救われ、また前を向いて生きてゆかなければならない。そのためにどうしたらよいか。この二つの話を聞いてそのように思いました。本日の話はこれで終わります。罪やあやまちを認めること、償うこと、許すこと、について、皆さんも考えてみて欲しいと思います。

生徒の振り返り

「ゆうちゃん」（加害者）は、元から優しい性格であったため、不本意に事故を起こした時の後悔、反省、悲しみがずっと残っていた。自分の罪が償いきれることは出来ないと感じながら、少しでも謝罪をしようと、毎月被害者の家族に仕送りをしていた。そんな時、相手から許しと受け取れる手紙が来たら、これ以上ない安心を感じたことだろう。ずっと背負ってきた重荷を下ろすことが出来たのだから。

一方で、（被害者のことを考えると）人を許すのは、とても難しいことだと思う。相手が自分に悪いことをした時、損得勘定で計れば、損しか与えていない相手をただ無条件で赦すメリットは無いからだ。しかし、そんな時に、相手を広い心で許すことが出来たら、一步、優しさに近づける気がするし、自分の心も穏やかになるのだと思う。僕はそういう人間になりたい。ただ今の自分は、相手に対して何かに対して許そうと思っても、自分の中で本当に許せていない部分がある。どうしたらそんな自分を許せるだろうか。

（赦しについて）

事故を起こした「ゆうちゃん」は、被害者の人たちには深い罪悪感を持っていたが、周りの人々に対してはニコニコと平然とした態度を取り、一人で抱え込んでいたと思う。そして、その罪悪感は被害者の奥さんの赦しをもって、初めて解放されたと思う。「ゆうちゃん」をその罪悪感から解放してくれた奥さんの優しさに対して感極まったと思います。

（償いについて）

僕は何をすれば「償い」となるのか分かりません。お金を払えばいいのか、自分も同じ苦しみを受けるのか、答えが見えないです。ただ、相手の心を満たすことが出来るのなら、それは誠実な償いとなっているのかと思いました。

「主の祈り」の中に、「私達の罪をお赦し下さい。私達しも人を赦します」という言葉があるように、人を赦す人ほど償いが受け入れられ、まったく人を赦さない人ほど他人からも赦されないと思います。

今回の歌詞にあるように、自分の大切な人に危害が与えられたら、なかなか加害者を赦すことが出来ないと思います。それは大切な人を思うが故なので仕方ないと思いますが、相手が償いを続けているのなら、大切な人のためにも赦してあげるとするのが良いと思います。

僕はこの夏、能登半島の震災復興ボランティアに参加しました。正直なところ、現地に行くまではどのような状況なのか全く想像がつきませんでした。最初に現地へ到着したときの率直な感想は、「本当にここで震災があったのだろうか」というものでした。駅を出た瞬間、目の前にそびえ立つ商業施設が何事でもなかったかのように見えたからです。そのため、「果たして自分にできることなどあるのだろうか」と思いながら、初日は移動を終えました。しかし、二日目に実際の活動現場へ行ってみると、被害の爪痕を目の当たりにしました。現場にはさまざまな物が散乱し、ガラスの破片もそのまま残っていました。その日は一日かけて家の片付けを行いました。作業は予想以上に大変で、丸一日かけても三分の二程度しか終わりませんでした。この経験を通じて、人の生活を支える物がいかに多く、それを整理するにはどれほど大きな労力が必要なのかを実感しました。三日目には、地元のお祭りに参加しました。午前中は仮装行列に加わり、午後からは神輿を担いで町内を練り歩きました。これまでにだんじりを曳いた経験はありましたが、神輿を担ぐのは初めてで、とても貴重な体験となりました。現地の方々は「地震の影響で若者が町を離れてしまい、祭りが盛り上がりなくなっていたので、再び活気が戻って嬉しい」と話してくださいました。祭りは人々を一つにし、町全体を活性化させる大きな力を持っているのだと感じました。四日目の最終日には、幼稚園の前でカフェを開きました。多くの高齢者の方々が訪れ、自然と笑顔が広がり、穏やかな雰囲気の中で会話が弾みました。その様子から、日常の中で誰かと気軽に話す時間が、高齢者の方々にとって心の安らぎにつながるのだと気付かされました。今回のボランティア活動を通して、震災復興には瓦礫の撤去など目に見える支援だけでなく、心のケアや地域の活性化といった目に見えにくい支援も同じように大切であることを学びました。この経験を今後の人生に活かし、将来また震災ボランティアに参加する際には、より役立てていきたいと考えています。

